@cafeでは大森にまつわる「ひと」をクローズアップ。編集部がその素顔に迫ります。

久が原のバス通りにある蕎麦屋「千登世庵（ちとせあん）」。三代目店主の登坂由美恵さんは、元プロボディーボーダーで世界大会5位入賞の実績をもつ。プロ引退後はスクールを開き千葉に拠点をおいて活動してきたが、突如蕎麦屋を営むことに。その経緯と思いを聞いた。　（取材・文＝中山良恵）

蕎麦屋の事がどんどん好きになっている自分が嬉しいと由美恵さん。（撮影：高道智子）

第52回

蕎麦屋「千登世庵」店主

登坂由美恵さん　とさか・ゆみえ

由美恵さんの活動の最新情報はホームページで
http://www.yumie.in/
- 陽（あ）けたら海へ
  福島の子どもたちを海に招待するイベント。2012年より開催。今年で6回目となる。
- Kahului（カフルイ）
  耳が不自由な女性だけのボディーボードスクール

海から得た力で　蕎麦屋から伝える

@蕎麦屋二代目に

「千登世庵」は50年以上続く蕎麦屋。祖父が開業し、二代目をお父さん、そして由美恵さんが継いで三代目となった。

2013年（平成25）の早春。父から高齢のため生まれ育った思い出深い店を、あと数年で閉めると聞いたとき、由美恵さんはいたたまれなくなったという。しばらくして夢に祖父が現れた。「蕎麦を打つ店の地下で泣いていたんです。もうこれは継いでくれって言っていると思って」。

でも迷いはあった。18歳から夢中でやってきたボディーボード。コンプレックスを払拭し、親に認められたい思いもあって、プロの世界で一心不乱に戦ってきた。海が由美恵さんの居場所となり、自信をつけてくれた。夢を叶えることの楽しさに気づき、スクールでも使命感を持って伝えてきた。

それを手放すことになる。しかし、生徒は「幸せでない由美恵さんからは教えてもらいたくない。自分で選んだ道を進んでほしい」と背中を押してくれた。

そして、決意新たに修行に入った。店で皿洗いをしながら、お客様の様子を見ていると、日によって反応が違うことがわかった。そこで出汁の取り方やそばの材料を数値化し、そば粉の割合も香りがよくなるように配合した。すると、お客さんが増えてきて、だんだん楽しくなってきた。「私は器用じゃないから、こうやって一つひとつ、きちんとこなしていくことで楽しくなっていくんだと思った」。

ボディーボードも練習メニューを日々ノートに記載し、それをこなすことが自信につながり試合に挑むことができた。蕎麦屋もアスリートと変わらないことに気づいた。

過去最高の売り上げをあげたとき、父から「由美恵が継いでくれてよかった」と言われた。今では、地域の蕎麦屋の会合にも唯一の女性店主として参加。女性ならではの意見を求められる存在となっている。

チャリティプロジェクト「陽けたら海へ」（撮影：いしざきがく）

「蕎麦屋はみんなと繋がれる場所。海は私をリセットしてくれる場所。海に入ると穏やかな気持ちになれる。私にとっては両方大切なんです」と、小麦色に焼けた蕎麦屋の店主は、まっすぐな瞳で言う。

海からもらった力で、夢を叶えることの楽しさを伝えてきた由美恵さん。蕎麦屋の舞台も加わり、その思いは大きくひろがっていく。

チャリティイベントをやりたいと言うと、すぐに仲間が繋げてくれる。人を惹きつける魅力とパワーが溢れている。

@コミュニティの場所へ

ハワイでのライディング（撮影：KIRBY FUKUNAGA）

由美恵さんは1973年大田区久が原生まれ。両親が営む蕎麦屋で姉と弟の3人兄弟で育った。忙しい両親の代わりに祖父がよく相手をしてくれた。2歳の時に「突発性進行性感音難聴」と診断され、それからは補聴器をつけて生活している。

両耳がほとんど聞こえないため、特別支援学校に通うことを勧められた。しかし、母親は行政にかけあい、午前中は地元の久原小学校の普通級に、午後は入新井第一小学校の障がい学級に通学した。

由美恵さんはまっすぐ人を見て、わかりやすい口調で話す。喜怒哀楽もはっきりしていて、会話に何の不自由も感じない。それは、由美恵さんの努力によるものだ。

小学生の頃、授業参観で由美恵さんは先生の話に相槌をうっていた。それを見ていた母親に、分かっていないのに頷いてはいけないと叱られた。それ以降、話す人の口元をしっかり見るようになり、しだいに読唇術を覚えた。そして母親の発音の特訓もあり、会話ができるようになった。「当時は辛かったけど、今は厳しくしてくれた母に感謝している」と由美恵さん。その思いを伝えるために、各地で講演活動を行っている。また、店には聴覚障がい者が相談にも訪れるという。

由美恵さん作のチャリティ絵本「ゆめぇちゃんのさがしもの。」を手に記念撮影

いずれは、聴覚障がいの従業員が接客することで、コミュニケーションの取り方をお互いに理解し、当たり前に会話できる店になることが理想だ。

今も時間を見つけては海に通う由美恵さん。蕎麦屋を営みながらも、ボディーボードを通じ支援活動にも力を注いでいる。

由美恵さんのまわりはとても賑やかだ。チャリティイベントをやりたいと言うと、すぐに仲間が繋げてくれる。人を惹きつける魅力とパワーが溢れている。

「蕎麦屋はみんなと繋がれる場所。海は私をリセットしてくれる場所。海に入ると穏やかな気持ちになれる。私にとっては両方大切なんです」と、小麦色に焼けた蕎麦屋の店主は、まっすぐな瞳で言う。

海からもらった力で、夢を叶えることの楽しさを伝えてきた由美恵さん。蕎麦屋の舞台も加わり、その思いは大きくひろがっていく。

DATA
千登世庵
大田区久が原 2-25-8
TEL 03-3751-5050
営業時間 11:00〜14:30
17:00〜19:30
日曜15:00まで
定休日　月曜

4面のご案内

★ ひと
まちで出会った、頑張っているひとの素顔に迫ります。次はあなたかも…？

- vol.51 2017年5月 三遊亭 ときんさん［噺家］
- vol.50 2017年2月 櫻井かおるさん・櫻井ひろみさん［マシュマロモンスター 営業・販売担当、オーナーシェフ］
- vol.49 2016年11月 臼田 恵二さん［(有)ウスダフォトスタジオ代表取締役］
- vol.48 2016年8月 岡 美喜子さん［トランジスターレコード代表取締役］

バックナンバーはウェブで！ www.oomori-cafe.com

［編集後記］■毎年のように各地で豪雨の被害。謹んでお見舞い申し上げます。■豪雨の原因といわれるのが地球温暖化。産業革命以降、温室効果ガスを急速に排出してきたことに起因している。■私たちに出来ることは化石燃料の消費を減らすこと。省エネ、省資源、創エネのスマートな暮らしが求められている。といいつつもお肉はやめられませんが・・・（お）

[STAFF]
Publisher / Editor in chief　鵜飼 修
Advertising　江上智子
Writer　猪瀬雅子・柘植彩子(1)、クラカタヒロシ(2)、杉山由紀(3)、中山良恵(4)
Proof reader　丸本文恵
Illustrator & DTP Operator　池田英子、髙道智子
Special Thanks　たかだあや、武藤花奈

大森まちづくりカフェ 第52号2017年あき号
［発行］2017年8月1日（年4回 季刊）
［配布］大森を生活圏とする地域に20,000部
［発行］特定非営利活動法人大森まちづくりカフェ編集部
〒143-0023 東京都大田区山王3-27-6
tel/fax：03-5935-7881 アンケートの宛先はこちら！
email：office@oomori-cafe.com
［印刷］有限会社三平印刷所
東京都品川区大崎 1-10-1 ☎ 03-3493-4911
Unyo! http://www.u-nyo.com/
次号は2017年11月1日発行予定です